

打破碗花花とその近縁種

村井千里

シュウメイギクの別名を柏書房刊・木村陽二郎監修の図説『草木名彙辞典』で調べると、秋明菊、秋冥菊、秋名菊（シュウメイギク）が大見出しにあり、別名としてきぶねぎく（貴船菊・黄船菊）、秋牡丹、草牡丹、秋芍薬（あきしゃくやく、しゅうしゃくやく）、高麗菊、唐菊、秃菊（かぶろぎく）、かぶら菊が記載されていて、漢名は秋牡丹、紫衣菊となっている。

中国の四川省涼山彝（い）族自治州や九寨溝付近でみかけたものの周辺を調べたので、それらについて説明してみよう。

四川省の南部の涼山彝族自治州は雲南省の雲貴高原の北側にある、九州全土程度の面積を有する山間地帯で、北緯25～30度の中にある。長江の上流の深い断崖が目立ち、泥炭層の深い草原の丘陵と段畑を耕して天に昇る農地、森林地帯からなっている。土砂崩れの多いこの地方は、段畑を休耕して植林したり、泥炭の採掘を制限するなどの対策で、JICAの植林指導が行われている地域である。主都の西昌へは成都から飛行機で1時間、市街地の街路樹はプーゲンビレアの柵作りで赤く染まるが、遠くには雪山が眺められるという珍しい風景に接することもできる気候帯にある。少し湿りのある林の際などでは水棉花が咲いているが、九寨溝で見られるような一面の群落でなく、5～10株が一群となって点在する。だが泥炭の草原では認められない。

九寨溝は四川省の北西部に位置し、成都から斜出する荒々しい岩肌の山々を眠江の流れに沿って抜けて行く高地で、北緯35度線に近い眠山山脈の南隅にある。標高3900m余の峠を越えたりで、行動には酸素ボンベを携帯するほどの高さである。ここを訪れたのは8月上旬、打破碗花花が広い窪地を一面に占有して咲く光景が各所に見られた（表紙写真参照）。

中国を原産地とするこの植物に似る大火草や野棉花などの分布も知られ、高地に育つ高性のキンボウゲ科アネモネ属の一連の植物は、独立した属への動きがある特異な植物である。

打破碗花花とその変種の秋牡丹と水棉花があり、秋牡丹が日本でいうシュウメイギクである。水棉花は白花一重のものであって、多少、分布も異なっている。

手元の文献によっては、分布の記載には差異があるが、『中国高等植物』（青島出版社）に、各種の中国内の分布図があるので、これを紹介しておこう。

打破碗花花 *Anemone hupensis* 江南、陝西南部、甘粛南部、四川、雲南東部、貴州、広西、広東北部、湖南、湖

北、迂西、安徽、浙江の海拔400～1800mの草原に生える。

水棉花 *A. hupensis* var. *alba* 萼片が白或は淡粉紅色で基本種と区分。海拔1200～3500mの雲南北部、四川西部、貴州の草原に生える。台湾にもあり。

秋牡丹 *A. hupensis* var. *japonica* 日本のシュウメイギクで、八重咲き、萼片が約20で、紫或は紫紅色。雲南、広東、江西、福建、江蘇、安徽の各地で栽培されたものが野生化している。

大火草 *A. tomentosa* (旧名 *A. japonica* var. *tomentosa*) 草丈が高く、葉も大型である。萼片は淡粉紅色か白色。河北西部、山西、河南西部、陝西、甘粛、青海東部、四川西部及び東北部、湖北西部の海拔700～3400mの草原に生える。

野棉花 *A. vitifolia* 大火草とは根出葉が異なり、3出複葉にならず、単葉である。四川南部、雲南、西藏東南部及び南部の海拔1200～2700mの草原や疎林中に生ずる。ビルマ北部、ブータン、ネパール、印度北部にも分布している。

『草木名彙辞典』のシュウメイギクは、秋牡丹についての限られた名を集めたもので、漢名の項にある紫衣菊については手持ちの文献の中に見出すことはできなかった。

その点では、水棉花をシュウメイギク（白花）とするのも考えた方がよいのでは。というのは、基本種の *A. hupensis* につけられた和名ではないからである。ヨーロッパで改良された秋牡丹と野棉花の交配種である *A. × hybrida* をシュウメイギクで流通させているのも混乱のもとで、洋種シュウメイギクとでもして区分することを進言したい。

ところで、打破碗花花、秋牡丹、水棉花、大火草はいずれも中国の漢方においては同様の効能をもち、多くの疾病に用いられている。ただ植物名と葉名が混乱しているものもあり、注意を要する。秃菊の別名は、これらのすべてが秃瘡に有効なことと関係があるのかもしれない。題名を「打破碗花花とその近縁種」としたのは早飲み込みで、打破碗花花の群生として写真を撮ったため、詳しく種について検討していないこと、分布地の標高の関係などから種の同定に自信がないことで、申し訳がない。



打破碗花花の分布



大火草の分布